ひょうご伝説紀行

妖怪と自然の世界

播州皿屋敷

―姫路のお菊井戸―

伝説

播州皿屋敷
　姫路のお菊井戸

紀行

『播州皿屋敷』を訪ねて
・怪談皿屋敷
・青山を訪ねる
・姫路城と城下町
・随願寺と御着城
・県域のお菊伝説
・『竹叟夜話』の皿屋敷

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

歴史博物館ネットミュージアム
ひょうご歴史ステーション

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

伝説

播州皿屋敷　―姫路のお菊井戸―

戦国時代、姫路（ひめじ）を小寺（こでら）氏が治めていたころのことです。小寺氏の重臣で青山（あおやま）に館（やかた）をかまえる青山鉄山（あおやまてつざん）という人がいました。
鉄山は常々、小寺氏に代わって自分が姫路城主になりたいと思っていました。小寺氏もこうした鉄山の野望に気づいていて、様子を探るためにお菊という女性を、鉄山の館に召使いとして住みこませていました。

永正元（1504）年、小寺氏の当主が亡くなり、まだ若い則職（のりもと）があとを継ぎました。これをチャンスと見た鉄山は、翌年の春、姫路の北にある随願寺（ずいがんじ）で開かれる花見のときに、酒に毒をしこんで、小寺一族を暗殺してしまおうとたくらみました。しかし、鉄山の子息小五郎（こごろう）が父を止めようとします。

「父上、そのような恐ろしいくわだてはおやめください。」
「おのれ小せがれ。じゃまをするな。」

怒った鉄山は小五郎を牢屋（ろうや）に閉じこめました。これを知ったお菊は小五郎をかばい、小五郎から鉄山の悪いたくらみを知らされると、急いで主君の小寺則職に伝えました。そのおかげで、鉄山たちのくわだては、すんでのところで防がれました。

しかし、それからすぐに播磨（はりま）では大名（だいみょう）同士の大きな争いがおこりました。その中で勝った方についた鉄山はついに姫路城を占領し、敗れた小寺則職は瀬戸内海に浮かぶ家島（いえしま）へと落ちのびていきました。

季節は梅雨のころ、姫路城を手に入れて大喜びの鉄山は、近くの土豪（どごう）たちを集めて宴会（えんかい）を開きました。そして、そばを振る舞うために、「こもがえの具足皿（ぐそくざら）」と呼ぶ小寺家の家宝であった十枚ぞろいの皿を出すことにしました。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

伝説　播州皿屋敷　―姫路のお菊井戸―

鉄山の家来である町坪弾四郎（ちょうのつぼだんしろう）は、常々お菊に好意を持っていたのですが、お菊は相手にしませんでした。これをうらみに思った弾四郎は、お菊が用意することになっていた十枚ぞろいの皿のうち一枚をかくし、お菊がなくしたと疑われるようにたくらみました。

皿が一枚足りないことを知った鉄山は、お菊をきびしく責めようとします。そこを弾四郎がなだめすかし、お菊は弾四郎の屋敷（やしき）に預けられることになりました。ねらいどおりに事がはこんで喜ぶ弾四郎は、この時とばかりお菊に思いを伝えますが、やはりお菊は相手にしません。おこった弾四郎は、お菊を屋敷の庭の松につるしあげるなど散々に暴力をふるった末に、井戸へ投げこんで殺してしまいました。

するとその夜から、井戸のあたりで「一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚…。」と皿を数えるお菊の悲しげな声が聞こえ、屋敷中にガラガラと皿の音が鳴りひびくようになりました。
人々はこれをおそれ、この屋敷を「皿屋敷」と呼ぶようになりました。

やがて、小寺則職は味方の大名の助けをえて姫路城を取り返しました。青山鉄山は討ち死にし、小五郎も父の行いをはじて自殺しましたが、町坪弾四郎はかくしていた皿を持って降伏を願い出ました。しかし、則職は許さず、室津（むろつ）にいたお菊の妹二人の仇討ち（あだうち）の願いを聞き入れ、弾四郎を討ちとらせました。

小寺則職は、姫路の十二所神社（じゅうにしょじんじゃ）境内に社（やしろ）を建てて、お菊をまつりました。お菊が弾四郎につるしあげられた松は、毎年梅雨のころになると枯れ、梅雨が過ぎるともとの緑の葉にもどるので、「梅雨の松」と呼ばれたといいます。さらにお菊の亡霊（ぼうれい）は虫となって、命日（めいにち）が来るたびにあらわれるとされています。

（『姫路城史』をもとに作成）

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

紀行　『播州皿屋敷』を訪ねて

怪談皿屋敷

「一つ、二つ、…」との皿数えが登場する『播州皿屋敷（ばんしゅうさらやしき）』。江戸を舞台とした怪談『番町皿屋敷（ばんちょうさらやしき）』とあわせて、全国的に有名な怪談の一つと言ってよいだろう。江戸時代から近代にかけて、浄瑠璃（じょうるり）、歌舞伎、落語、小説、映画とさまざまな分野の作品にリライトされてきており、古くからよく知られてきた。

このサイトでは、『姫路城史』（姫路城史刊行会、1952年）に掲載された筋に沿って紹介した。これは江戸時代後期に書かれたと見られる、『播州皿屋敷実録』という書物を要約したものである。

ただし、このサイトでは、小学生にも読みやすくするために、かなり枝葉をそぎ落として紹介した。『播州皿屋敷実録』では、お菊は実は小寺氏の家臣である衣笠元信（きぬがさもとのぶ）と恋仲で、主家への忠義のために元信から命じられて青山家で働いているとされ、また青山鉄山（あおやまてつざん）の子供小五郎も、小寺則職（こでらのりもと）の妹である白妙姫（しろたえひめ）と恋仲になっていて、そのために父のくわだてを止めようとしたなど、もっと複雑な恋愛関係が描かれ、そのほかにもさまざまなサブストーリーが組み込まれている。

菊女ヶ霊（『北斎漫画』）

こうした複雑な構成は、もはや素朴な「伝説」というよりは、現代の小説のような、「戯作（げさく）」と言うべきものである。『播州皿屋敷実録』のような、非道な主家や男たちの横暴にさいなまれる女性が、亡霊となって復讐（ふくしゅう）を遂げるとの構成は、封建社会における主従関係や、義理や道徳にしばられた家族関係などに日々直面していた当時の人々にとっては、共感しやすい話だったようだ。

青山を訪ねる

さて、話の舞台は姫路周辺に設定され、姫路城のほかに、青山や随願寺（ずいがんじ）といった、姫路付近に住む人々にはなじみの深い地名が現れる。まずは、青山から訪ねてみよう。

青山には、江戸時代からの集落の北側に小さな丘があり、その麓に氏神をまつる稲岡神社（いなおかじんじゃ）がある。青山という地名は、この丘が鎮守の森として、常に青々と木々が茂っていたところからついたとされている。

稲岡神社

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

宗全寺跡

青山の現地を訪ねると、皿屋敷伝説よりも、室町時代後半の一時期播磨を治めていた、山名（やまな）氏に関する寺跡や居館跡の伝承が目立つ。まず、江戸時代からの集落の中には宗全寺（そうぜんじ）と呼ばれる寺跡があり石仏が数体まつられている。ここは山名宗全の菩提寺（ぼだいじ）であったとされている。

小丸山

また、西方の小丸山（こまるやま）には山名氏が播磨を治める拠点とした館があり、守護代の太田垣（おおたがき）氏がいたと伝えられている。さらに青山地区の北部、かつては「遠山（どやま）」と呼ばれた集落内には、太田垣氏の菩提寺として法灯寺（ほうとうじ）があったと伝えられ、跡地には「遠山の地蔵さん」と呼ぶ石仏をまつる小堂がある。

このように、青山に山名氏関連の伝承が多いことは、皿屋敷伝説を考える上でも興味深いのだが、このことは、また後ほど述べてみたい。

法灯寺跡

姫路城と城下町

姫路城天守閣の二段下、上山里曲輪（かみやまざとくるわ）の中には「お菊井戸」とされる古井戸がある。もちろんお菊が投げ込まれた井戸、ということになっているが、この井戸自体は、江戸時代の文献では「釣瓶取井戸（つるべとりいど）」と呼ばれており、大正初めに姫路城が一般公開されるようになったころから、「お菊井戸」と呼ばれるようになったのではないかと考えられている。

姫路城内の「お菊井戸」

姫路城天守閣と「お菊井戸」

車門跡付近
（左が中堀、右が船場川）

『播州皿屋敷実録』では、お菊の身柄を引き取った町坪弾四郎（ちょうのつぼだんしろう）が、姫路城の車門（くるまもん）の近くにあった自らの屋敷で、庭の松につるし上げるなどしてお菊を拷問し、さらに姫路城内へ連行して鉄山が見ている前で井戸に投げ込んだとされている。

伝説の末尾には、このお菊がつるされたという「梅雨の松」が出てくるが、実際に江戸時代中ごろまでは、車門の外、中堀（なかぼり）と船場川（せんばがわ）との間に、梅雨になると枯れ、梅雨があけると緑になる「梅雨の松」があった。ただし、この松については宝暦12（1762）年成立の『播磨鑑（はりまかがみ）』では、元和年間（1615～24）に姫路藩士が植えたものであるとされている。また『播磨鑑』では、お菊との関連には触れられておらず、純粋に不思議な樹木として紹介されている。名物の松が先にあって、それが皿屋敷の話に取り込まれていったようだ。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

また、青山鉄山は城下の桐の馬場地区に屋敷を構えており、お菊が殺されたあと、この屋敷の井戸からも皿数えの声が聞こえたという。「桐の馬場」という地名は江戸時代の姫路城下町の中にも見られ、現在の県立姫路東高校や国立病院機構姫路医療センターの裏手付近にあたる。しかし、この馬場は江戸時代前半にできたものである。

車門も桐の馬場も、いずれも江戸時代初めに池田輝政（いけだてるまさ）が現在の姫路城と城下町を建設して以降の地名で、伝説で語られている戦国時代にはなかったはずである。この話は、あくまで江戸時代の戯作として、事実とは混同せずに楽しんだほうがよい。

桐の馬場跡
（県立姫路東高校東側）

竹の門跡

そのほか、『播州皿屋敷実録』からは離れるが、18世紀末～19世紀初頭に、姫路藩酒井家の家臣たちが編纂した史書『六臣譚筆（ろくしんたんぴつ）』には、姫路城下町の東側、五軒邸（ごけんやしき）地区にあった小幡九郎右衛門（おばたくろうえもん）の屋敷内に、「お菊の墓」があるとされている。この話には若干の手がかりがあり、文化3（1806）年の『姫路城下絵図』（当館蔵）では、五軒邸地区内の竹の門（たけのもん）近くに、小幡加賀右衛門の屋敷が記されており、この屋敷のことかと考えられる。しかし残念ながら、『六臣譚筆』に見えるお菊の墓は、現在確認できない。

お菊神社

お菊神社

奉納用の皿

お菊の霊がまつられている、十二所神社（じゅうにしょじんじゃ）境内にあるお菊神社。境内の案内板によれば、皿にちなんで飲食店関係の人々が皿に願いを書いて奉納すると霊験があるという。この神社については、幕末期に姫路藩士の福本勇次が著した『村翁夜話集（そんのうやわしゅう）』（姫路市立城内図書館蔵）では、「是ハ近年祭リヨシ」と記されていて、伝説の時代である戦国時代まではさかのぼりそうもない。ただし、大坂で寛保元（1741）年から上演されていた浄瑠璃『播州皿屋敷』で、お菊が十二所神社境内にまつられているとされているので、お菊神社の存在はこのころまではさかのぼるようである。

奉納された木像
（左から小寺則職、
お菊、青山鉄山）

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

随願寺と御着城

随願寺本堂

悪役青山鉄山が小寺氏暗殺の陰謀を仕組んだ舞台となった随願寺。この寺は、古代以来の天台宗（てんだいしゅう）の寺院で、平安後期以降は播磨天台六ヶ寺の一つとして、播磨一国全体の安穏を祈る寺院として信仰を集めた。戦国時代末期には、小寺氏出身の僧侶である休夢（きゅうむ）が寺内の実権を握っていた時期もある。この伝説で小寺氏の花見の舞台とされたのも、こうした歴史的背景を踏まえたものであろう。

現在の伽藍（がらん）は、江戸時代中ごろに姫路藩主榊原（さかきばら）氏の寄進によって再建された本堂を中心としたものである。いまは静かな境内だが、かつては「三十六坊」と呼ばれる多数の子院（しいん＝寺僧の住居）もあったと伝えられ、かなり繁栄していたようだ。境内を訪れると、こうした子院の跡地に梅林が開かれている。伝説では春の花見の舞台となっているが、現在の随願寺は梅見の名所である。

小寺氏は、戦国時代に姫路周辺を治めていた領主である。播磨守護赤松氏の南北朝時代以来の重臣で、戦国時代には、御着（ごちゃく）を拠点に飾東郡（しきとうぐん）周辺に勢力を広げ、戦国後期には守護赤松氏から半ば独立して地域を治めるようになった。小寺氏が本拠とした御着城跡には、現在も部分的にではあるが堀跡が残っている。

御着城

県域のお菊伝説

さて、皿屋敷伝説は姫路や江戸だけではなく、全国にたくさんある。伊藤篤『日本の皿屋敷伝説』（海鳥社、2002年）では、岩手から鹿児島まで、合わせて48ヶ所の伝承地が紹介されている。

こうした皿屋敷伝説の広がりの背景としては、たとえば姫路から黒田氏が藩主として移っていった福岡県内に皿屋敷伝説が見られるなど、領主層の移住や親戚関係にともなって広がっていったと見られるものもある。このほか、宗教者の布教活動や流通業者の活動、さらには演劇を通した伝播などが考えられている。

兵庫県内では、姫路のほかに、佐用郡佐用町口長谷（くちながたに）に「お菊の墓」があり、背後にある利神城跡（りかんじょうし）にはお菊が身を投げた井戸があるとされている。また、尼崎市大物（だいもつ）の深正院（じんしょういん）にも、お菊が投げ込まれたとされる井戸の跡がある。

利神城跡（奥の山頂部）と
口長谷の集落

尼崎のお菊伝説は、時代を元禄の頃（17世紀末）とし、藩主青山氏の悪家老と、それに恋慕される侍女お菊が主人公となっている。尼崎のお菊伝説は、尼崎藩主の青山氏と、姫路の皿屋敷伝説の悪役青山鉄山との名字が共通することからできあがったのであろう。

このほか、お菊の亡霊が虫に姿を変えて現れるという、お菊虫の伝説がある。この虫は、アゲハチョウのさなぎのことで、かつて姫路などでは夏の縁日でも売られていたようだ。こうした伝説は、姫路や尼崎のほかに、加東市（かとうし）の旧滝野町（きゅうたきのちょう）などにもある。

深正院の井戸跡
（右側の塀の下）

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

『竹叟夜話』の皿屋敷

おもちゃ絵　怪談皿家敷

さて、『播州皿屋敷』には、このサイトで掲載したもののほかにもいくつかの異なった筋立てがある。

このうち最も古い形態を示すと見られているのが、『竹叟夜話（ちくそうやわ）』に収録された話である。『竹叟夜話』は、天正5（1577）年に永良竹叟（ながらちくそう）という人物が著したとの奥書があり、これが事実であるとすれば、現在のところ『播州皿屋敷』を掲載した最も古い書物となる。江戸の『番町皿屋敷』と姫路の『播州皿屋敷』との、どちらが古いのかという議論が古来あるが、近年では、『竹叟夜話』の奥書に注目して、『播州皿屋敷』の方がより古いとの見方が有力となっている。

『竹叟夜話』収録の話は、時代を室町時代後半、播磨を山名氏が守護として治めていた時期に設定している。舞台は青山に拠点を構えていた山名氏重臣の小田垣主馬助（おだがきしゅめのすけ）の館となっており、ヒロインは花野（はなの）という名前で書かれている。また、皿数えの皿は、小田垣氏が主君山名氏から拝領した5枚そろいの鮑貝（あわびがい）の盃で、これを花野に想いを寄せる若侍の笠寺新右衛門（かさでらしんえもん）が隠し、花野を拷問して殺害したとされる。そして、花野の怨念が夜な夜な現れては仕返しをくわだて、また花野がつるされた松を「首くくりの松」と呼んだ、と記されている。

山名氏が青山に拠点を構えていたことは、同時代の史料では確認できない。しかし、現地に比較的濃密な伝承が残されており、個々の具体的な場所は別として、大まかに青山付近に拠点の一つがあったという程度であれば、事実とみてよいのではないか。

また、『竹叟夜話』に山名氏の重臣として登場する「小田垣」なる人物も、実際の山名氏の重臣で播磨守護代の一人となった太田垣主殿助（おおたがきとのものすけ）をモデルとしたものであろう。そして、その後の『播州皿屋敷』で一般的となる悪役の「青山鉄山」とは、この「小田垣」が青山にいたとされてきたことから創造された人物と見ることができよう。

しかし、『竹叟夜話』では、皿は5枚であり、ヒロインの名前も「お菊」ではない。井戸も登場しない。よく知られた皿屋敷の話になるまでには、いま少し要素が不足している。『竹叟夜話』の筋立てに、いつ「お菊」というヒロインの名と10枚の皿が重なったのだろうか。その過程は現在のところはっきりしない。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

用語解説

【『番町皿屋敷』】ばんちょうさらやしき

一般的なものは、江戸番町に住む旗本（はたもと）の青山主膳（あおやましゅぜん）の下女お菊が、皿を紛失したことを責められて井戸に投げ込まれて殺され、そのたたりが青山を苦しめたとする話。江戸を舞台とした皿屋敷話としては、現在のところ正徳2（1712）年の『当世知恵鑑』に見える牛込（うしごめ）を舞台とした話が、残された書物の中では最も古いと見られている。なお、歌舞伎の演目としては、現在は1916（大正5）年の岡本綺堂（おかもときどう）による新歌舞伎作品がよく知られている。

【浄瑠璃】じょうるり

楽器の伴奏にのせて章句を語る音曲。語り手を「太夫（たゆう）」と呼ぶ。このうち義太夫節（ぎだゆうぶし）という流派の語りに、あやつり人形が加わるものを人形浄瑠璃（文楽、ぶんらく）と呼ぶ。本来は演劇的要素が希薄な語り物であったが、江戸時代中ごろから人形劇を伴うものが主流となっていった。

【山名氏】やまなし

南北朝の内乱の中で、山陰地方を中心に勢力を広げた一族。南北朝最末期には一族で11ヶ国の守護職を持ち、「六分の一殿」とも呼ばれたが、明徳の乱（1391年）によって勢力を削減された。乱後は、但馬（たじま）などの守護職を一族で分有したが、嘉吉の乱（1441年）によって、赤松氏旧領国の播磨（はりま）、備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）、美作（みまさか＝現在の岡山県北部）の守護職を獲得した。

応仁・文明の乱（1467―77年）では宗全（そうぜん）が西軍の主将となった。戦国時代前半には、播磨の再占領を目指して赤松氏と数度戦ったが、その後、但馬、因幡（いなば＝現在の鳥取県東部）の一族間での争いや、重臣層の台頭によって次第に衰えていった。

但馬守護家は天正8（1580）年に羽柴秀吉（はしばひでよし）によって滅ぼされ、子孫は旗本となった。また、因幡守護家の子孫は但馬の村岡（むらおか＝現在の香美町村岡区）に6,700石の領地を持つ上級の旗本（はたもと）として存続し、明治初年の高直しによって11,000石の大名となって廃藩置県を迎えた。

【太田垣氏】おおたがきし

但馬国南部の朝来郡（あさごぐん＝現在の朝来市）を本拠とした中世後期の領主。但馬の多くの中世在地領主と同様に、古代の日下部氏（くさかべし）の子孫と称した。山名氏が但馬の守護となると重用され、但馬や備後（びんご＝現在の広島県東部）の守護代に任命された。

嘉吉の乱後に山名氏が播磨守護職を獲得すると、播磨に置かれた三人の守護代の一人ともなった。戦国時代には一時期領内に発見された生野銀山（いくのぎんざん）の権益を掌握したとも伝えられるが、天正年間における羽柴秀吉（はしばひでよし）の播磨・但馬進出によって没落した。

【『播磨鑑』】はりまかがみ

宝暦12（1762）年ごろに成立した播磨の地理書。著者は、播磨国印南郡平津村（はりまのくにいなみぐんひらつむら＝現在の加古川市米田町平津）の医者であった平野庸脩（ひらのつねなが、ひらのようしゅう）。享保4（1719）年ごろから執筆が始められ、一旦完成して姫路藩に提出した宝暦12年以降にも補訂作業が進められた。著者の40年以上にわたる長期の調査・執筆活動の成果である。活字化されたものは、播磨史籍刊行会校訂『地志　播磨鑑』（播磨史籍刊行会、1958年）がある。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

用語解説

【池田輝政】いけだてるまさ

1565―1613。織田信長（おだのぶなが）の家臣である池田恒興（いけだつねおき）の次男。父と兄の元助（もとすけ）が小牧・長久手（こまき・ながくて）の戦い（1584年）で戦死したために家督を継ぐ。関ヶ原の戦い（1600年）の後、三河吉田（みかわよしだ＝現在の愛知県豊橋市）15万石から加増されて、播磨姫路（はりまひめじ）52万石の領主となる。慶長6（1601）―14（1609）年にかけて、羽柴秀吉（はしばひでよし）が築いていた姫路城を大改修し、現在見られる城郭と城下町を建設した。

徳川家康の娘である督姫（とくひめ）を妻としたために江戸幕府から重用され、長男の利隆（としたか）のほかに、督姫が生んだ子供たちなども順次それぞれに所領を得て、一時は一族で播磨、備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）、淡路（あわじ）、因幡（いなば＝現在の鳥取県東部）に合計100万石近くを領有した。慶長18（1613）年死去。

【『六臣譚筆』】ろくしんたんぴつ

姫路藩士が編纂した藩主酒井家にまつわる逸話を集成した書物。編者は松下高保、石本勝包、新井有寿、大河内規章、山川能察、藤塚義章の6人。もとは『官暇雑記（かんかざっき）』という書名であったが、享和元（1801）年に藩主酒井忠道（さかいただみち）が、6人の家臣が編纂した書物というところから『六臣譚筆』と命名した。

【十二所神社】じゅうにしょじんじゃ

現在の姫路市十二所前町にある神社。この場所は旧城下町の南西隅近くにあたる。現在の祭神は少彦名神（すくなひこなのかみ）。社伝では、延長6（928）年、一夜のうちに十二茎の蓬（よもぎ）が生え、その葉で病を治すようにとの神託に従って、南畝（のうねん）の森（現在の姫路駅西側付近）に創建されたという。その後、安元元（1175）年に現在地へ移ったとされている。

【随願寺】ずいがんじ

現在姫路市白国（ひめじししらくに）の増位山（ますいやま）にある天台宗（てんだいしゅう）の寺院。古代以来の寺院で、もとは山麓の平地部にあったが、元徳元（1329）年の洪水被害によって現在地に移転したとされている。書写山円教寺（しょしゃざんえんぎょうじ）などとともに「播磨天台六ヶ寺」の一つで、平安時代後期以来、播磨全体の安穏のための法会が行われる寺院と位置づけられていた。

【播磨天台六ヶ寺】はりまてんだいろっかじ

円教寺（えんぎょうじ、姫路市書写）、随願寺（ずいがんじ、姫路市白国）、八葉寺（はちようじ、姫路市香寺町相坂）、神積寺（じんしゃくじ、福崎町東田原）、一乗寺（いちじょうじ、加西市坂本町）、普光寺（ふこうじ、加西市河内町）の6ヶ寺のこと。平安時代後期以来、播磨の国衙（こくが＝国の役所）が主催する法会に参加するなど、播磨全体の安穏を祈る寺院として位置づけられていた。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

用語解説

【小寺氏】こでらし

播磨守護赤松氏の重臣の一つで、南北朝時代に播磨の守護代を務めた宇野頼季（うのよりすえ）の子孫とされる。応仁の乱後、赤松氏が播磨・備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）・美作（みまさか＝現在の岡山県北東部）を回復すると、播磨の段銭奉行（たんせんぶぎょう）という租税徴収の役職につき、御着（ごちゃく＝現在の姫路市御国野町御着）を拠点に勢力を広げた。

戦国前半には、赤松氏当主を支えて備前（びぜん＝現在の岡山県東部）を拠点とする浦上（うらがみ）氏との抗争を繰り返した。戦国最末期の当主である政職（まさもと）は、天正3（1577）年に織田信長に服属したが、翌年三木の別所長治（べっしょながはる）が離反するとこれに同調して御着城に籠城した。しかし、三木城落城にともなって没落した。

戦国時代後半に重用された家臣に黒田氏があり、小寺の姓を名乗ることを許されている。この黒田氏から出て豊臣秀吉（とよとみひでよし）に仕えたのが黒田孝高（くろだよしたか）で、黒田氏は江戸時代には筑前国（ちくぜんのくに＝現在の福岡県）福岡藩主となった。小寺氏の子孫も江戸時代には黒田家に仕えるようになった。

【赤松氏】あかまつし

播磨国佐用荘（はりまのくにさようのしょう）内を本拠とする領主で、則村（のりむら）は鎌倉幕府倒幕戦で活躍し、室町幕府から播磨守護に任命された。明徳の乱（1391年）後は、播磨、備前（びぜん＝現在の岡山県南東部）、美作（みまさか＝現在の岡山県北東部）の守護職を持ち、幕府の侍所所司（さむらいどころしょし）に任命される家柄（いわゆる「四職（ししき）」）として中央政界でも活躍した。

しかし、嘉吉元（1441）年に、満祐（みつすけ）が将軍の義教（よしのり）を殺害する嘉吉の乱を起こし、幕府軍に討伐されて一旦滅亡する。その後、一族の遺児である政則（まさのり）が加賀半国の守護としての再興を許された。応仁の乱が始まると、東軍方について旧分国の播磨、備前、美作を回復したが、その後も但馬（たじま）の山名氏（やまなし）や、重臣の浦上氏（うらがみし）との対立抗争を繰り返し、天文年間には山陰の尼子氏（あまごし）の進出によって一旦淡路（あわじ）へ脱出したこともあった。

戦国後半には分国各地の有力者が自立傾向を強めたが、守護家としての権威をもとに、影響力の及ぶ範囲を狭めながらも存続していった。最後の当主である則房（のりふさ）は、織田政権に服属した後、豊臣政権によって阿波（あわ＝現在の徳島県）へ移され、そのまま病没したとも、関ヶ原の合戦で西軍方についたため自害させられたともされ、最後は定かではないが、これ以後断絶した。

【御着城跡】ごちゃくじょうし

姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）にあった城。赤松氏（あかまつし）の重臣である小寺氏（こでらし）の居城。江戸時代中ごろの絵図では、四重の堀の中に山陽道や町家を取り込んだ、いわゆる「惣構（そうがまえ）」を持つ大城郭として描かれている。この絵図の描写がどこまで信頼できるかは慎重な検討が必要であるが、中心部付近の堀跡の一部は現在も地表面から推測でき、また近年の発掘調査で二の丸跡の建物群や堀跡などが検出されている。現在二の丸跡の一部は城址公園となっている。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

用語解説

【利神城跡】りかんじょうし

佐用町平福（さようちょうひらふく）にある城跡。播磨の西北部、美作市（みまさかし）を経て鳥取市（とっとりし）へ至る因幡街道（いなばかいどう）の沿道にある。伝承では中世においては赤松氏一族の別所氏（べっしょし）の城であったとされる。南方の口長谷（くちながたに）には、別所構跡（べっしょかまえあと）と伝える平地の領主居館の跡も残されている。

慶長6（1601）年に池田輝政（いけだてるまさ）が播磨に入ると、平福周辺で22,000石が甥の由之（よしゆき）に与えられ、現在遺構が見られる城郭の建設が始められた。山上に石垣造りの主郭を構え、山麓に城主屋敷、武家屋敷と街道沿いの町家などの城下町が形成された。元和元（1615）年からは輝政の6男である輝興（てるおき）が25,000石の平福藩を与えられ居城としたが、寛永8（1631）年に輝興が赤穂藩（あこうはん）を継承したことによって平福藩は廃藩、利神城も廃城となった。

【『竹叟夜話』】ちくそうやわ

『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぽうちえぶくろ）』巻40に収録。主に姫路（ひめじ）や龍野（たつの）の周辺にあった逸話、霊験、奇聞などを集めた書物。奥書によれば、天正5（1577）年に永良竹叟（ながらちくそう）という人物が記したとされている。永良竹叟は、『播陽万宝知恵袋』に収録された他の数種の書物にも名前が見え、実在の人物と見てよい。赤松氏一族で、永良荘（ながらのしょう＝現在の市川町北西部）を本拠とした永良氏の一族と見られる。

【『播陽万宝智恵袋』】ばんようばんぽうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後にも若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

参考書籍

●伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
竹叟夜話（収録：『播陽万宝知恵袋』下）	1988	編纂：天川友親、校訂：八木哲浩	臨川書店
播州皿屋敷并入梅松（収録：『播陽万宝知恵袋』下）	1988	編纂：天川友親、校訂：八木哲浩	臨川書店
播磨の妖怪たち――「西播怪談実記」の世界――	2001	小栗栖健治・埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター
実録　姫路城とお菊皿屋敷	1930	清瀬永治	清瀬黙堂書房
日本伝説　播磨の巻	1918（1978復刻）	編著：藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
姫路城史　上	1952	橋本政次	姫路城史刊行会
兵庫の伝説	1980	編著：兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説　2	1986	編集：有井基、絵：のざきジョー	神文書院

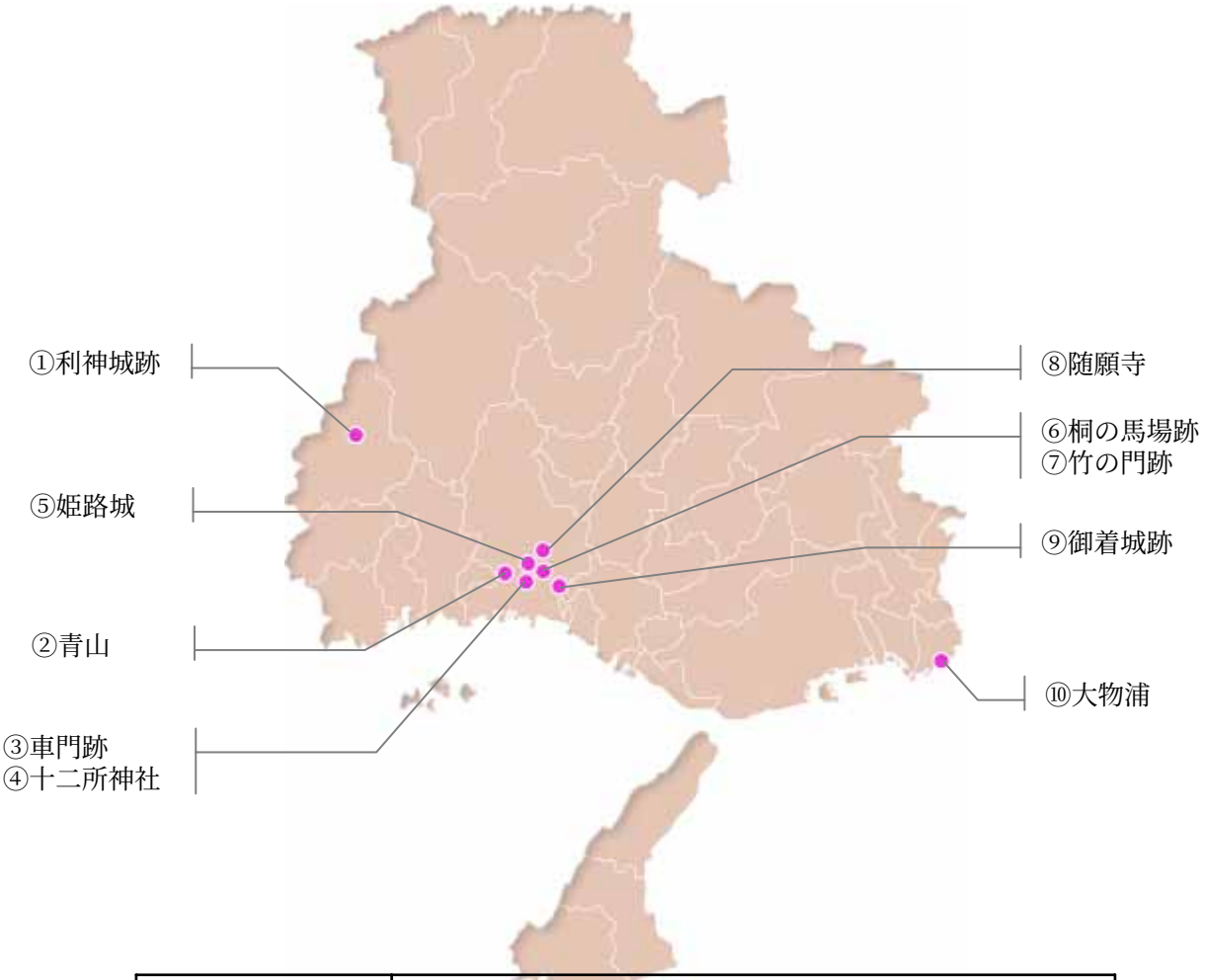
Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

●歴史･文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播州皿屋敷（収録：叢書江戸文庫11『豊竹座浄瑠璃集』2）	1990	作：為永太郎兵衛、浅田一鳥、校訂：早川久美子	国書刊行会
近村めぐり一歩記（収録：『播陽万宝知恵袋』上）	1988	編纂：天川友親、校訂：八木哲浩	臨川書店
播州古処拾考（収録：『播陽万宝知恵袋』上）	1988	編纂：天川友親、校訂：八木哲浩	臨川書店
播陽因果物語（収録：『播陽万宝知恵袋』下）	1988	編纂：天川友親、校訂：八木哲浩	臨川書店
播州続古処拾考（収録：『播陽万宝知恵袋』下）	1988	編纂：天川友親、校訂：八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者：平野庸修、校訂：播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者：秦石田、校訂：井口洋	柳原書店
尼崎志　1	1930（1974復刻）	編纂：尼崎市役所	尼崎市（復刻：名著出版）
伝説の兵庫県	1961（2000再刊）	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター（再刊）
郷土の民話　東播編	1972	編集："郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
国宝姫路城　播州皿家敷お菊物語	1973	岡本常太郎	いろは産業社
播磨伝説風土記	1976	編集：読売新聞社姫路支局	姫路駟路の会
史蹟の里　あお山	1979	編集：青山自治会、青山史蹟保存協会	青山自治会、青山史蹟保存協会
佐用町史　中	1980	編集：佐用町史編さん委員会	佐用町
日本の伝説　43　兵庫の伝説	1980	宮崎修二朗、足立巻一	角川書店
妖怪の民俗学（ちくま学芸文庫）	2002（初出1985）	宮田登	筑摩書房（初出：岩波書店）
日本伝説大系　4　――北関東編――	1986	編集：渡邊昭五	みずうみ書房
阪神間の民話散歩　むかしと今と	1987	編集：読売新聞阪神支局	阪神読売会
姫路市史　14　別編姫路城	1988	姫路市史編集専門委員会	姫路市
日本伝説大系　8　――北近畿編――	1988	編集：福田晃	みずうみ書房
「城東地区」をたずねて――文化財見学シリーズ24――	1990	横山忠雄	姫路市教育委員会文化部文化課
姫路市史　11上　史料編近世2	1996	姫路市史編集専門委員会	姫路市
江戸東京の怪談文化の成立と変遷	1997	横山泰子	風間書房
「青山地区」をたずねて――文化財見学シリーズ40――	1998	出口隆一	姫路市教育委員会文化部文化課
雅楽頭酒井家の『六臣譚筆』について（収録：兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』12号）	2000	堀田浩之	兵庫県立歴史博物館
日本の皿屋敷伝説	2002	伊藤篤	海鳥社
『皿屋敷』はワンダーランド――『播州皿屋敷』のヒロイン、お菊さん――（収録：橘川真一編著『はりま伝説散歩』）	2002	埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

所在地リスト



①利神城跡	佐用町平福、口長谷
②青山	姫路市青山2丁目、青山5丁目、青山西4丁目、青山北3丁目
③車門跡	姫路市本町
④十二所神社	姫路市十二所前町120
⑤姫路城	姫路市本町
⑥桐の馬場跡	姫路市本町
⑦竹の門跡	姫路市城東町竹之門、五軒邸4丁目
⑧随願寺	姫路市白国5
⑨御着城跡	姫路市御国野町御着
⑩大物浦	尼崎市大物町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行　―妖怪・自然の世界―
http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/
編集発行　兵庫県立歴史博物館
〒670-0012　兵庫県姫路市本町６８　℡ 079-288-9011
第1刷　2009年4月1日

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.